特別
イ 4
3163
1(12)

千載和歌集巻第十一

戀哥一

堀河院御時百首哥たてまつりける時

初恋の心をよみ侍りける

源俊頼朝臣

なにはえのもにうつもるゝたまかしは
あらはれてたに人をこひはや

二条太皇太后宮肥後

またしらぬ人をはしめてこふるかな
おもふこゝろよみちしるへせよ

大宰大弐重家

わかこひはやかてもしらぬゆふくれの
こゝろ我ものならぬなりけり

権中納言俊忠家恋歌十首よみ侍ける時
はしめの恋の心を
よめる

後二条関白家筑前

おもひかはいつのわかるゝことなりて
ちきりしことのしるへなりけむ

女につかはしける

左京大夫長能

としつもるこのよのなかにわかこひは

もゝのあまりしはかもいかさまなる
たゝしきを　輔仁親王
年のうちにかもあまし思ひとく
いつはりしとしらすやおもひきや
法性寺太政大臣
花ともえみえしくもかきりも雲の
うはのそらにひとしきかな
中院右大臣
つきもとも袖のゆきかへる
あきとくしきかも
ほとゝきすなきつる
とかくこそのあまのいかくれ
大納言成通
なこそよるのはまのことこそ
ときにこゝろなきおもひのかき
大炊御門右大臣
あきのとこのよなかのやまの
おもひわひさてもいのちは
あれはかなしきや君かくれかたん
左京大夫顕輔
かすならぬ身をもいかにせん山のおくにも

なきものやいそいそん宮城野
ニるがの尾上は松よりて九重
さゆりはしみやいやかたのうさ
待賢門院堀河
雪ふかき岩のかけ道あとたゆるや
つまさの き
よしのゝさともはるはきにけり
上西門院兵衛
岩ねかねくも山はきて水をこえ
もしきてかくのはなをさう当
惟明親王家五十首の会に立春の謌
とくある
前参議教長
冬こもりにいつしか尾の上の軒
さつのみとたよりもしたふから
人はつゝかる
藤原長能
思ふこといはまほしく松の緒か
ちりとちるらんはぢはをよ
うつほのはしの人のこゑきて
はそてのへ人の橋のまさして
あすもたひとゆふへの香をもとめよ
つゝみの際
前大納言公任

おほつかな明ぬる法路の人やわか
しらむと乃菊やさしまよひける
夜の中の白雲といへる人々よみける
梅の右大臣
人しれぬ物を思ふ比の袖なれし
なかれしもいふもしかれは
権中納言経長家乃歌合に
名立恋といへるをよみ侍る
たちしわりけすしも
源経兼朝臣
おもふ

なきちらや明ぬる道の露をもちえん
恋の心をよみける
源明賢朝臣
なかれしあまのわきこてもくるしき
おもふこといつまでといわんわ
百首歌よみ侍りける時恋の心を
よみはしりける
右大臣
人さへあふまて我思ふ人の河水
おもふらんちかひのまへのしもや
なましれぬ
大納言実国

悪しともいつぬよめのまへ秋の雨
ありはをさらすいふさのわれ
従三位頼政
おもへともいそさらすよのわたる
ありはのまもに久しき秋の空
宰相中将
入ちのつまのよしもわがまへ
をらくいせしやうかふるへる
前大納言
あきはめ梓をもとも
禁裏下この

へいつまよそあふるかわ
祐舜しはわくくみ時恋しぬ
かきよふ所
刑部卿範兼
こゝろあらせゆく野にいくさ
たきのあとまろも
人まさきぬ
新院
人きみあたまろの川のさや
いつのひぬたのかぬ
新古
めづらしき人の
人つまとわれ

秋のよのあけときさる人のまちかね
鳥のねのこゑそかみわけいりぬる時
霞鳥ととゆるやまとかな
賀茂重保
つきもたのまし人のこゝろやあまの返し
さよふけてつゆにそ霞むかたの月
鳥のねふそくかな
藤原清輔朝臣
あさ〳〵いのちさき秋のなるとなれはしと
人はいはてまつあかつきのわかれ

二条院讃岐
ことしとまたわかるゝ時はいつのことゝもあはぬこゝろそ
源通親卿
ちる鳥はいかにしくなる秋のはなとも
たとへはしらすかゝりつゝ世にすむ
横河の嶺とたえなかりけるまことの
みちみる時はとまるゝつゆのいのちわ
たのむかたてつれなくも悩
仁照法師
春をいとふうつゝと思ふすつかのほとの

あやなく人をこひわたるかな時、
たいさうまて　花園左大臣
夕よのわかれにあまりつらさに絶ん
人をかへるにもとめわひぬる
大宮右大臣
まくらもなきたにこそとはれる君も
恋しさにまとろむよひも夢やなかりける
前中納言匡房
君をこふる夢かひなきものとも
目のあたりはしのつるる

後宮にしのひてまゐりけるに夢のうちに
琴なとものこしのあひた絵
ひかれ
二条関白
さめてのち音にのみひきわめるものを
松かせになかはあふかしとなれ
百首よみ侍ける時恋の心を
式子内親王
いかにせむやまくらとにゆめの
たのめよもすからにしの夢のうちに
る前斎院にまかりける時恋の心を

よこほれるる　右大臣

ちるはるゝつゆとをもふ人はゆ

うひのよほとゝきすなくさとよ

郭公さつきまて　藤原頼輔

あるしへはつきんへしのゝすゝやかに

きゝめさめもよもとたのもしいわせ

源有房

もしほくむやきのけふりの色はこくへ

袖のきつゝしここにとゝいのまも

源師光

恋しさをとふきくかたわすれなは

いつまてかわかしのひなん　つ

藤原惟規

たのめとやいのちをやすくいふらん

きつしと　行もなくも庵うわ

覚盛法師

もかりのうきくもはりそいせ海へも

みをつくし枝のなにはもたくへぬさい

夏はいつまてそ恋のまそほとにいける

もとよある

賀茂重保

人志れすおもふ心はふか草の
りのまとにこそしらまし
さえしまと
津守國光
りん我をつしらぬへきも思ふらむ
あふことのはのまとかなくらん
大中臣清文
あふれとも折よきにまとあふかは
こはいかになみしつくかは
源重貞
人志れすおもひのみしなみ

いまはさることのなさとをまつ秋
能因法師
ゆくへなくれぬるのはほとゝきすまつかは
たゆさをうれしきゝのこゝろのあはれ
大中臣定雅
春雨にいしのよのかはらぬまゝの花
夜のゝるとも志らすへの夕き
祝部成仲
君こひてみるぬなふらむ晴夜ともふかねにい
さらぬみにさもいろつきなれ

二條院に皇后宮大弐常陸

めつらしき毎まゝ迷ふ人のしらぬ小萩

さつるゝまゝよくゝよ之つゆそ涙そ

賀茂重延

いつのと袖よ時雨のかくうくたる

おもひいそのかしめするゝらと

権中納言下乃時の百首歌乃時共

乃やそよみはわかる

従三位頼政

あましやとそしつる袖乃さかくる

ちるころのすまゐと人やうらん

皇嘉門院別当

きのひ秋さ秋はいろよそそまわ

いかりもよわるさまのあれ

女のなるさまあるまへ折て侍われ

つゝかる

大宰權帥經房

かゝ見へいのことのこころのしめき萩

ともそもにまたさきふるあそと

花て

家人しく次

ちりそれともまやきませるとめ萩花

人はいさ心もしらすいまはたゝ
恋のことくさよそにわかれぬ
大納言宗家
人めとハつゝむと思ひしをとこそ
袖のうへあまりなみたいさすゝみわか
右京大夫季能
何まことふかきよいりしたかひとおもふ
ありしこそめくりの松の秋そわかれ
法眼実快
よろつ人はとられぬきみよそ
見そめしやとおもふよ袖のしつくそ
参議伊経
つれなさのうきよにゆるとそなし
うらみつゝかくれなきに忍ふ
権大納言時の御時おもひ
恋のことそよなき
藤原季経朝臣
思ひつるこそこゝろもあはれなる
人の世のつらさもしる
月をみてまことにもあはれ

ゆ恋のこゝろもとよりはかなかりけり

皇太后宮大夫俊成

としもへぬいのるちきりははつせやま
をのへのかねのよそのゆふくれ

忍恋

あまりもはしたなくやはおもふらん
こひわひてなみたにぬるゝたもとかな

まへの入女

千載和歌集巻第十二

恋歌二

摂政右大臣の時家の歌合に恋のこゝろをよめる　大納言公實

おもひあまり人にとはゝやみなせ川
むすはぬ水に袖はぬるやと

題しらす　花園左大臣

ゆめにくも人をみるよはあらしなと
きみもやわれを思ひねのしの

二条太皇太后宮大弐

逢ことのなくてハくちつ風になりまさ
るらんとも人はしらなん(た)
白河院三条殿にわたらせ給ける時
あまたの人とも恋乃歌つかうまつりける
によめる　　　大中納言雅兼
つれなきをいかにせんとも思ひしに
さらにしはしも袖よりそ(?)ゝる
権中納言俊忠家にて恋乃十首の
歌よみ侍ける時祈不逢恋といへる心を
よめる　　　源俊頼朝臣
うかりける人をはつせの山おろしよ
はけしかれとはいのらぬものを
日吉乃やしろにて祈恋といへる心を
よめる　　　修理大夫顕季
うれしくハ後のこゝろを神もきけ
ひくしめなはのたえしとそ思
依恋至実恋
　　　前参議伊家卿
たまさかにおもひかけける佐伯乃里は
手枕

とこやこわかるたひとも有明の

基俊〔?〕道恵〔?〕　権中納言俊忠〔?〕

思ひきてのちもたつきとゝにあはゝ

よそへは八重のそたちつゝまてや

きえなましつれしける〔?〕

皇太后宮大夫〔?〕

いゝもの道こそなけれ思ひ入〔?〕

思ひきゝ〔?〕をおもひしきん〔?〕

法性寺入道前太政大臣

ひさかたの時もくものうへにさりとも〔?〕

やかて〔?〕

源雅光〔?〕

むもの原野鴨の〔?〕しの心にかゝりてし〔?〕

いとゝをゝ袖はわすれとものゝ〔?〕

藤原家基〔?〕

冬の夜〔?〕事もとゝし月と影〔?〕

いのちやは思ひのまゝにとまるらん

中院入道右大臣〔?〕中納言時〔?〕

しらかわのにおもひのまゝとよあら〔?〕

藤原家隆朝臣〔?〕

思ひわたる涙は〔?〕ともなくとゝかへらん〔?〕

この世にはしもなく人をまつやと
[illegible]わか前にたてと
[illegible]
参議雅經
[illegible]
[illegible]人にいひわたる[illegible]
逢坂[illegible]といへる[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]袖は[illegible]
たゝしきを
[illegible]

[illegible]
[illegible]袖[illegible]
権大納言實家
[illegible]
[illegible]
権大納言實房
よしさらはあふ[illegible]人[illegible]
[illegible]
右衛門督[illegible]
いつとなくおもひ[illegible]

思ふ事なくてそみましもちとせや

俊恵法師

夜もすからもの思ふころはあけやらて
つれなき人のねやのひまさへ

従三位頼政

なけきつゝあかすよるこそ旅ならめ
あつまちのさやの中山なかなかに

寂蓮法師

むらさめの露もまたひぬまきの葉に
きりたちのほる秋のゆふくれ

左衛門督通親

さりともと思ふ心もいのちにて
いのちをのみかけつゝあふかなかの

賀茂重保

猶まつにちらすなかなのいまよりは
ちるまてもゆきまの花をまちし物を
すゑの松山なみこゆる時なるらん

参議教長

よそにのみ
いかにせんしのふの山のしたもみち
としふれともあふよなきかな

時々撰集のつかさ人は名の立しく
めすと人つけまゐらせけるは
三親王也撰集後
あまた後拾遺集に入れさせ
なほ撰者ことに定めかねて
大納言通俊卿撰ばせ給ひ
こと侍りけるを撰者のほどに
ともやとしつゝして侍りつるに
そこそこつゝみ侍る　清輔金葉集大納言経信の
あらためんと思ふべからず一度の

ならぬ事ありけり大方集々
後三条院御時云々侍りける
時撰者のうちとなかりけり
左目かし
これなんめでたき事にて
ならんほとゝおもひはかりし
顕輔卿　六条修理大夫顕季　撰びて侍りける
左京大夫顕輔
さいかゝるあたなき世にまたいとつゝしき
いのちとなりてなほとほき

題しらず　　平忠盛朝臣

一よとてよかれしとこのさむしろに
やかてもちりのつもりぬるかな

藤原道経

ゆふへはあはれみねのまつ[illegible]に
ま[illegible]のうらや[illegible]

兼頼朝臣

いかにも[illegible]人と思ひますよ
[illegible]いのち

源師光

しひてしもまたつれなしと思ふやはかな
おもひいつ[illegible]

道因法師

あふことの[illegible]
つれなさの[illegible]

顕昭法師

つれなきを[illegible]
このよには[illegible]

縁慶法師

うき[illegible]

人もたのめさえつまゝ隔

能因法師

ありへとも枕はやかましかん

あすしらるたゝをに夜半まはらきぬと

無常の心をよみ侍りける

藤原乃参の

しはしもえさゝあつまるみとえとも

わかれとも人はいつまてしもの哉

おもふ事さらにいひてしらぬ物

殷富門院大輔

うきをはしめてわれおもはけにさわれ

右大臣に侍りける時百首歌よみ侍る命

はわりける時述懐の歌とてよみ侍わ

ゝ隔

権大納言左大臣下

花さきは人の身にいはしはん人のたえなるはや

あいこめもつれてもちるをしのふへしら

宮内卿

実卿京といふへかちよなる隔

右衛門督通

今世事をとつましともかくあまもなき

身ぬの里ぬちなるたのきつに

思ひそめけるはしめのほとのさきかし
侍りけるに人につかはしける
二条院讃岐
あさやかにともしもそてのぬれたるこそ
そめまつことをあやなしともや
あきやまのおもにゆふくれの風を
式子内親王
袖のいろは人のとふまてなりもせよ
ふかき思ひをきみしたのまは
契りおく秋をまつともいひをくるかなとよひわ
うらみ
左近中将良経
秋はなとしものうきよりもかなしきは
をきのはにもむすふつゆの色の
ゆふへのそらとそあはれなる
前東宮大夫下
夏ともとのこさてとまらぬ雲八
くものはもあはれにわかれを
思ひ侍る恋といひとるかへりわ
うらみ
前東宮大夫實
秋のよはのきはのしもとしもふかき草

たちくる波にあらはれやせむ

題しらす　藤原家隆

花よりも花そ[illegible]まちかれん

おもひやる[illegible]

よみ人しらす

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

殷富門院大輔

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

西行法師

[illegible]

さるはとけまた人いしらしふ
たいしもと　　従三位頼政
我袖のしたはなみたにしほれつゝ
なかるゝみよしのぬかすもあまし
　　法眼静賢
しほるゝ袖のいろまてかはるとも
ありそのうらのあまよとうや
　　俊恵法師
おもひ草葉すゑにこそのとはむすふ
まくらにつゆのみたれてなけくとは

　　前京源信範卿
我おもふ人の心をとふまてと
あはれみよつくしのうらにたゝのみ
　　賀茂政平
なをし事のくるしきにもなき
人はこゝろやいはぬすまん
　　源光行
こひしなんなみのうきやわか里の
みちたちいとまなし
寄石恋といふ事をよめる

二條院讃岐

わか袖はしほひに見えぬおきの石の
人こそしらねかわくまもなし

民部卿成範

もかゝまてるふそはけきにふ心ちもくれうと
しらふ人あるゝいとはまし橋もと

大宰大貳重家

逢ふことはとえゝの明き松くま河
あふみともとはまとゝゆくゆかりゆくもの

刑部卿範兼

いものあまりとふるゝ河のせとはよなく
あはとそわすれしきへとも思ふ
石清水乃玄人のうたはぬ
かゝる時ゝ峯松遠くとふるゝもとよ
侍らる
勝事物語侍
すみふなくりとも
えとしもしへめあるの松ゝ
遠乃あとゝよなゝ

寂蓮法師

思ひるゝのゝ夢たえりゆくゝてゆめゝれ

ありそもと人のをよそにつらき秋

俊恵法師

よもすがら物おもふ比は明やらで
ねやのひまさへつれなかりけり
いろこりまさるたまするにそてのつゆかな
のみふかなたもとはかはくまもなしのそ

[illegible]原是忠

恋ゆゑはとこもあらし人あさきす
もろよりもふかくいとかけし物を

孝忠朝臣

思ひきやこゝろみちのしるへこそ
たくひなきわかゆくすゑのかなしさ

静縁法師

ものゝふのいはぬきはかりのうやと
まちわふるそらにとしをへぬらん
ちきりしをまことなしにてわすればなる
人はつれなき

大江維順これより

わすれなはおもへくとそしるへなきはもとさしたるわ
あけぬれのもしは思ひかけしとも

[illegible]維盛

とりかへしわかよのあふ

いとゝしもほしわひぬる人をこそ草の

前京極殿御歌下

霞ゝちりまた寝のかひの枝の風

駒ゝをも

源師光

しらぬひのまちをいつまて思へとも

身ハのそむくも人ハつれなき

女のもとへいひつかはしける

藤大納言実国

恋しさハ我のみそとたゝ思へともよ

とゝろハつれなき人もわとも

右衛門督通

きよくとゝまるへき山の光のまよ

るをそれハちるもとゝまりてわかるめ

思ふゆへにかるよしてたをまちかね

ちよん（ふ）のもと水そ鏡とかゝりて

そのよしてるよりてらして人わ

うつる

前京極衛門下

まつのうへにもきよくうつる橋ゝつく

とゝまとしいもまてあつくしけやらん

清洛る段の厳上紅葉人をすて

暁朝遠後恋といふことを
よみ侍りける

権中納言通親

ときつしるをたのめもふもたえさらそ
おもひたえぬるよのひのなかさを

前参議国方卿

相川のあさくのみこそ人数ならぬ
なをとけぬ稲をたのまれん

皇太后宮大夫俊成

おもひしるやとおもはれのみこそまさるあれ

ゆくよもかはらぬ
ものかは
もんとく

千載和歌集巻第十三

恋歌三

たいしらす　　藤原実方朝臣

ちきりきなまこしことはたのみなから

つらきものそやうきをはたえいへは

相模

さりつゝおもふ心にそむかれてへとは

あふことはすまき次のゝりくもとし

つれもなきをわかれゆく人のこゝろを

藤原基俊

うき思ひよそゝみなともなし

屋いつこぬるとよのもふくて別あかる

よるゝの枕しつねすなかきな

有の七日の夜太政大臣歌合

いひ侍りけるとしのかはりに

とし頃人のいひわたりけるを

つかはしける　　小大君

七夕はしつとおもひしほとにぬる

こひわたるなかのちきりそうらむ

枇杷殿の皇后宮に入りまいりて侍りけるに

ちかき弁乳母の局のこしの出て
侍るを清かりける硯をかしきを
みつからよみておはしける
宇治前太政大臣
うゑおきしやなきのいとのたえなはと
けぬやとふきくる風をまたなん
返し
さらにしも人のこゝろもとしふれは
弁乳母
ゆきのきえぬとの法のうへには
藤河の清水にて時をそこなへる

る時恵の心をよめる
大納言公実
むかしをしのふなみたもやかては
つゝみぬもしのおもひのみとそ
中納言師時
恵のうちにこゝろのまゝにさくら
おもひとしふる思ひのそらのわ
源俊頼朝臣
あふさかやまれにあふ女のもとへ
きのふしのひてしらぬしるくいふ

中院右大臣中将に侍りける時歌合し侍りけるに

源俊頼朝臣

よとゝもにいはまのしほのこゝろをは
恋之人のもをもたまもりの音つきもなくて

読人の恋の月のかをりけるまきみせよ

俊頼朝臣

たのみつるこゝろもつきぬなかにやも
ことわりしたまへる
（？）

（？）のおのこともふかきまゝせとせしよ
也女房のもとにつかはしける　右衛
三条大皇太后宮大弐
まろ周防内侍のもとへつかはしける
たのまれぬ中納言もたえかねてはつかしの
ゝふ

大納言公實

なにはえのありあけのつきのあはれ流れ
きよみかた　おもひも(?)　流れの
中納言俊忠
恋の心をよめる

権中納言定家

和歌ハ此家の人も源氏の物語を見て
かくと申也ちかきよの下草
俊成入道男也ときハ時ならぬ
云々京極中納言といへるなり
参議時昌
あらそひには之桜といふも見え
たかひあらそひあらそひける
俊成卿よそ月清花の時に
ありともありけるうち建保

道といへるなりけり
皇太后宮大夫俊成
いはゆるなれとも次のくにのなり
たの名也時への名しハ文時の
歌さかしきて 俊成入道の大臣
冬あきのよのまへなりかくなき摂
こいつくるまて折にふれて
従の時皇太后宮大夫ありかきのま
給へるまうる後のあかつきの

従二位家隆

よろつよとちきりそめつる宿なれは

たえしよのそらにしられしものを

園清晴さへかりてしはしめてまつ

くらきにわかとものかたちまち

さとも鴉ねのなかき夜をまつ

田子のうらにまつ

人まくとかねつまちに物思ふ

こゑしとさくらはうちとけの

花園左大臣

待賢門院加賀

手まくらのわかともかくもしらぬ夜は

いろいろのまたそふるたけきをくるしさ

石ちよのつねもしのはれける時のいつの語ね

くやとよおもふ

参議教長

恋しもいはさるもとをうへよまちとか

ときをしもいとかもしのへまつ

左京大夫顕輔

ちるかなとはおもひわかれつるけにしつとも

神なみのつくをしもつらんさるやさめ

待賢門院堀河

ゐなし世をいとひしくものうへの
月見るよりハ物をこそおもへ
上西門院兵衛
よひのまもまちけんやあすもと
いまはこのすゑとなりたのめぬへん
待賢門院安芸
ふけまさる秋の夜ふかくかはすらめ
まつよのすゑにもとしをすくすかな
頃親京のかたをよる
従三位頼政

人いはゝあれなとにしもあめ
秋のかたつる(?)をまちてあめ
思ひやる一所よりはわかる有明の月よ
夜ふかく涙まてつゝかな
権中納言通親
おもへたゝ入逢のさひしさにあけはの
月よりわたるのよそいつの秋
摂政右大臣の時百首の歌よみ侍るに
いはぬよりまたとくにそあるる
皇太后宮大夫俊成

ふるはたのをかへのまつの一夜妻
ちかひしをわするゝや恋のならひにて
稀逢恋のこゝろをよみ侍し
前東宮僧都
こひしさもあふにまさりてつらき
袖のうへにあまるなみたのちる
藤原隆信朝臣
君やくるわれやゆかむとつまはたれ
うらみてもうらみはてぬは梅
夢中契恋といへるこゝろを

冬夜後朝恋
もろともにかへるみちをやなけく
しらまほし
中納言国信の女のもとへつかはしける
ゐる
前中納言匡房
あつまやのあまりにもあらぬ
とはぬまの
寄枕恋といへる心を
久我内大臣
つれもなき人の心を

[illegible]

権中納言定頼

[illegible]

[illegible]

前参議親隆

[illegible]

伊勢[illegible]

[illegible]

藤原清輔朝臣

[illegible]

俊恵法師

[illegible]

道因法師

[illegible]

思ひわひさても命ハあるものを
うきにたへぬハ涙なりけれ
宮内卿伊実(?)備中守(?)
きつゝなる時(?)ハ[illegible]
おもひすてゝ[illegible]月[illegible]
はかなきかな
遊女戸々
ひたすらにぬるよもなし[illegible]
ふしのまに月をなかめ[illegible]
左衛門中将(?)としつるへし[illegible]
中原清重(?)

源[illegible]やくちいそのかみ[illegible]
袖ハかりぬらすにたゝぬれ[illegible]
前右京権大夫(?)清輔(?)朝臣
女よりのいまハこよひ[illegible]
前参議成範(?)
わかるゝ小篠のかねもよしをし
ちくさなるよとのゝ[illegible]
寂蓮(?)法師
藤原伊経
わくらハにこよひの[illegible]

あさ夕まくれめならぬ絶ぬれ
魂の恵といへるもとなるか
讀人しらす
おもひねてたまへる乃かくる草枕
やすらしもしやへのなやみなき
月の恵といへるなもと
鶴とはしきなる人の道絶て
あやなく月の夜の間めくる
權他人恵といへるなもと
田太下

きみのいのちといふなやなかなかし
おもひいてつへきことこそなしは
右近中将兼輔
しきをもしいとくれぬへきなみたかは
なをさへ人はつましきかは
女ゐきみのえる事かはる
ちと歌ことの僧のつのりなり
大蔵卿澄房
いつはかへしくら風ならしらぬ
たまもしのよのなかまたはかな

題しらす　従三位頼政

おもひねの夢よりかへるやとなをそまて
うしきへ袖もとやまをさめし

源師光

なきなこそしくやまき橋を君かうし
おもひかねにねぬるよひのあまのすみか

参議雅経

いとつきぬもとしとやいかうらへ
わかれをはなれてえすまみかくれ

源光行

なかきよにうきいのちをしもつれなくて
つれなしいとおもひのはて

皇太后宮大夫俊成

わかれきてはつ袖しくとひもぬれ
なれぬやくるまいつしのもとのあき

皇嘉門院尾張

命よりまさるほどのあはれのやまの秋
なかさいつくへにつもとよかるる
奥よりくるとはおほすれはのめそつ
いまそる

右近中将忠良

あまとくのよはによもすからあかつきのかね
に打しほれける草のまくらは
菅の岡に落る涙としらつゆを
太皇太后宮小侍従
見し夢のさめぬやかてのうつゝにて
わすれむとたのめしほともかへりみや
人かはりけり
二條院讃岐
きえぬるやあふせなき身の石清水
別れし床の末ていふとも
見えて

まつほとのさめぬ石清水も思ひやる
かくとりのまの床ならましや
春下に待まつる時雨一声の梅花
はかなき晴に桜の花の名はとしよのおしむ
かなる
摂政太政大臣
帰るさのしのゝめくらき村雲も
あかつきとつくる花有明はつらき
皇太后宮大夫俊成
わするなよよゝのちきりをすかはらや
ふしみのさとのありあけのそら

千載和歌集巻第十四

恋歌四

題しらず　和泉式部

いかにして夜の心をなくさめん

ひるはなかめにさてもくらしつ

こきも人めとこそ明色のつ瀬くると

おもふとものうらみもしきかな

色のし清みきくなし人のもとにかはす

わすれられるよしきせ侍てつかはける

藤原清輔朝臣

まつそいかにとてもおほつかなきを

まよひそ世おもふきのよつのにあふらん

久しくもありまへこともかけし人の音

信せす侍りけるにつかはしける

小式部

思ひ出よたまとなる人のたくまは

うちかへしいふにかふるかもとしとい

大宰帥敦道親王世中絶侍りける比

秋つかた思ひやそ侍りてつかはしける

よみ人しらす

和泉式部

待ともつゐわよひいあまよしの
おかもひもしけぬ梅けはなさくと
なきしまて
経ふれ人松すりて尾上とめつ世
あまつしとよもとなるたのもの雨
女乃もとのわ変ふて惜りとつりり
ゆのゑ
藤原實方朝臣
竹乃葉末つりも乙めかて尓かあるよまをと
まろふよのはとこやそしかやにくあかる
堀河の院御時百首歌たてまつりける時
恋のこゝろをよめる
藤原基俊
あひみつよわひきてつゝ袖とよみそ
いのこいしくる松油とよのひめ
藤原仲實朝臣
まつもいはほさつもと乃あまよしなゑ
いふかりし梅がはる忘之つゝわ
法性寺入道前太政大臣内大臣に侍ける時
家にて寄華恋といへる心を
よめる
源雅光

吹風にたえぬこすゑの花よりも
とゝめかたきはなみたなりけり
逢不遇恋といへる心をよみ侍ける
大納言成通
あひみしを夢といひなしていつまてか
物おもふことはいつまて有けれ
権中納言俊忠中将に侍ける時歌合
し侍けるに恋の心をよめる
伊予三位
恋わひてあはれとたにもいはまほしく
ことわりなきかなしきことのみ
関白家にて十首の恋の歌人〻よみ侍ける
時来不遇恋といへることをよみ侍ける
あかへ
権中納言師時
立のほる人をまつとてよしなしこまつ
こひしさはゆめをたのむよりもわかれは
左京大夫道経
新しくきつ名りおもふ人になり
つましにのこれのひとつまの
絶恋恨の歌人といへる心をよみ侍ける

冬歌　　　　　久我内大臣

わか世にはいつもかはらぬ色をこそ
ちすゝむわかのまもしまとこの
常盤井入道太政大臣
のこるそよある

上西門院兵衛

冬川のあさるやしもの海かな
かきにし人をとめやそあはれの

前参議教長

あさまたきのもとやの軒のしもの草
さのいもあしかしるかれる

皇太后宮大夫俊成

恋しさのこゝろの夜の市にしつもりなん
さゝぬおもひやむかしをもりなん

待賢門院安藝

ふゆをのこゝろのまの池にしみ水鳥
またそゝやこのめかへすなかれぬ

前大納言為家

おもひつゝ心の夜の野へのつゆやう
しつかにもくものかけもし

あさ事はいかふらんたえよいのちそなく

なけれさつすしとうすかれよのそうゆか
たえてふたよの人をいのちあたのうとゝみゆ
にか　　顕昭法師
人つてにきゝもやいとゝかなしからん
ひきやかよりもそのうへと
女のもとへ人あまたの梅につけてつかはし
ける　　平貞文
あさましやたれのこはいのこゝろのうなれ
まちのほのまつ花のけしきの[illegible]
[illegible]しまて

人のうへとかねていはまし
つらきもさらにつらからむと
真のまゝにとたのめし女につかはし
ける　　参議為通
奥のまゝにもさらにとも[illegible]の
わすれいをみしもわすれまし　のみ
しのひその[illegible]にはつまつる女のてる
いそしなのとえんてわすれつゝのかる
従二位家隆
君まつとさきのはの思ひいつゝし[illegible]の

水のおもはあさくゝもらぬかゝみにて
うへの松のことも花はなとしるへき
もとつまゝ月のまゝにつもり付侍る
隆源法師
思ひきやとしのつもりは見つれとも
しらすなひのたえんしのとは
前大僧正
あはれきゝあまのはしたてもとふかなき
思ひ松へ橋もとむかしと思へは
従三位頼政

よくきのみちをつきまとひつきて
きのたかへぬしのゆくすゑのかは
姫月の一日比佐つはいさゝかゆくり
かゝる
二條院讃岐
年のはもよしまゝかゝり花の
春のよのゆくゑうき雲に
清左ゝ よみ人しらす
菊のなかへこはやこまかにいてし
かゝりはねをはなれてつゝ鳴
寄源氏物語恋といふことをよみ侍る

夕もゝのや明ゝ春ハ松のわか色のそう
かしはゝのひてさみふゝてきさを
あま浪のなせきと松すゝのしゆうかはと
きよ見の屋しまゝわいすゝるはかわれ
二条院讃岐　人のまつこともなき
ゑそまつわかる晴さのいらふ道の心を
よそハ　刑部卿範兼
月まつと人にハいひてましこのえたもも秋
たえまとめつゝる花松ゝるそのかく
影さやけさ　左京大夫顕輔

あしの屋はつまゝめつゝしはまかの
たまゝ人松ひと松すはわろま　圓位法師
さてもまたゝ雲井のよそに月
尋ねきて秋りやとゆ尾ゝとい
あはれとも夕ゝ人のまよ萬葉ちあるそ
かすみき秋つまいまる人むしと　宜仁新
梅風のまゝ見人わもつゝきの風
こひきよとそハかとゝめとも

源仲綱

心なき人もあはれをしるやとてわかなくさまを
恋ハとしふるいのりかなふるみのはに
寄関恋といへる心をよみ侍ける

二條院内侍参河

きのもとのゆるしもなくてせきもりに逢ふ夜すくなき沈
たゝのめぬ波の音のみさへまさる哉
恋のうたとてよみ侍る

湖波

一夜とてよりしらし逢見のともしけま

尾のゑしも萩かつゆもうすめつゝなき
元久元年よりまゐり侍りける時逢不
遇恋といへる心をよみ侍ける

権渡る右大下

たなしくてのりかへとしふよのかるを
あふにいのちもそのへてましのハ
ある里恋をいひとゝ侍恋といへる心を
よみ侍りける

権中納言雅頼

あふ事のあつまとゝへつまて八
わかれのなくもそよしも尾のまよひ物を

うつりまき青嵐もとより吹といへる心を
よみ侍りける　権中納言経房
うつり香にまよふこゝろの人もとめける
松まきのつまとなりける物を
何かに秋のこゝろもとにもなかりける
女まつあふよそのみるみなとんとや
くるしきつゝけり　右近中将忠良
はゝきゝのやとのこゝろやいかならむあはれ
うるはしきすかたの宿の
言へはわかる時恋の心をよめる

同　俊恵法師
思ひかねうちぬる宵もありなまし
ふきたにすさへ庭の松かせ
殷富門院大輔
あらいそのかりやめもしほのあまのそてしほ
めのわれまつめのみしこそいのちなりせ
隔河の恋といふ心を　従三位頼政
しら糸のかはのへに見まく欲しきを
いくたひいとゝ涙よりなかるらん

絶えてしつらむいのちなりけれ
右京大夫隆信朝臣
人しれす思ひそめてしいつのまに
ゆめのうちにもあふよしもかな
稀逢不絶恋　藤原親盛
いかにしてたえぬはかりのちきりにて
あふせをいとふなかのかはせそ
恨夜右大將
晴後逢恋とよめる
源仲綱
侯よりもよしや中川わたるとも
なかれてのちもあふせありせは
隔路後思恋といへる
二条院讃岐
いまさらに逢ふとふしも大かたは
うき身のかたのつらさなりけり
恋といへるこころを
太皇太后宮小侍従
おもひわひ人のこころのうきくもの
かかるしものとしるよしもかな

道因法師

伊勢しまや市師の浦のあまたにも
かつかぬ袖はぬるゝものかは

冬不遇恋といふ心をよめる

俊恵法師

おもひやまやまのみわし夜はすからかたしく袖を
きつくしてあかしつるかなあふとは

春夜恋といへる心を

うしかりのくしてはわすれつゝ春の夜を
夢はしもあかぬ人の物かは

恋とてよみて人につかはしける

法印静賢

身のほとをしらてもおもふものならは
人をみることもなきならんあはれ

摂政太政大臣家歌合によみ侍りける

摂政家丹後

思ひねの夢はよそにもこゝろにも
あはれとそみる人のつらさに

皇太后宮大夫俊成

逢事はかたのゝさとのさゝの庵

よもすがら寝る人はまくら結つゝきさ
判云　左　民部卿脱
心得候へどもあるらむものゝ歌とは
名所とは人のかたへいふあるあるに
さるのちに橋ならぬ女の消息をうかゞ
ひよりて行かたはなをこそ枕の方へ
は勝るなるべきにやとまつ
ことに流れ侍るなり
権大納言家
松のはにいかでかまつは二度ならん

うつゝともゆめともわかぬ枕かなとも
右　又人しまさ
たけきつゝのうちとこそめはるかいつゝもまつまく
まつもしらとくとなるをめくものゝ心
判云　次　右近中将忠良
是ハ人前おもひいとおかしわ
あはれなるにまされるものいかさ
権中納言通親
きのふとそもうゝと松のするぬかれ
君まつのしてあふとやとこまし

千載和歌集巻第十五

恋歌五

題しらす　相模

うつゝにてのあくとめし夢ともよ
このよのはかなきこそやなこふらん

和泉式部

すもをすけい袖いくもそこゝろせぬわ
おもをさき事をつきをとゝまよかる
としもいつとなくてよにあめし
秋まもそこ人みもへわかれ

有明の月かけをとこゝまにおかせよ
人の心にたのめし物かは
紫式部
わすらるゝ世の事ととはるゝとも
あちや忘れる世のきさ悦めす
たのめぬ花をのこととつけしまゝの
いまおもことをめたわれいつへし
くもに
一宮内侍
よのなかや賀茂の御神もれつ
思ひわすれもそれもわすれ

ありしひかる人のたえまほとゝおもひ
思ひみつゝありける
大貳三位
うらみし命のまゝにあまをとめの
あまりしけみのたえめのなきの雨
をときそまつ侍りけるおもひとゝと
人のおもひやとはてゝよそつゝにわ
きいひかつらん
相模
あま人はとまやもあらし華をそとき
あやしきにとゝまりの秋の人めまちをと
女の身なき山ほとゝきすまちわひ
いりて侍りまちつゝはひさかる
大納言典侍
山のはもみちのきたるゝをたゝ見の
もみちのみ人のこゝろかよふもみち
時はおもひの夕のしるしてつゝわ
かたもとのしあはれそふて侍りわか
右京大夫
流れゆくかな
はてゝこそおもへのいはぬことのは

ねたのむへきかたもみえぬうきことの
むかしあひしりて侍ける男のわすれて
ほかへまかりてたえてのちことひとに
久しくおとつれぬころ秋のゆふくれにつかはしける
赤染衛門
あきかせのこといふねともなほたのまは
たちよるままにうらみへき身を
中納言国信卿家歌合に恋の心をよめる
藤原基俊
人かしはおもひもたのみしみつの
水茎の
せきのみくみてぬれにしものを
堀河院御時百首歌たてまつりける時
同時恨の心をよめる
隆源法し
うらことはいはすしぬへき人もあるを
思しれとおもふなかのうらみかな
花園左大臣家に侍ける女房に
ともなかりけるをりまうてまかりていひつかはしける
此楊かはるへきものとも知らなくに
あまくたり秋は思ひやたえぬらん

擣衣の心をよましめ給ひけるにそのころ
かりける　中院右大臣
あはれとや人もとがむらん衣
うつ三の里に秋まくらゐる
かすみの衣かうつ音あはれ
りうるさなりにつるとこそ
ころ衣ほれたかはろかの恋のたえ
ころを　待賢門院堀河
うき人もまつのふかきにを思ひけるや
もみちつゝいるとのみかへりなん

上西門院兵衛
うたまくらよのうちもおもひせよ
つきはかのはたかのきはいつかは
前参議親隆
しきたへの枕にかよふ衣のひびき
夢もゆるさぬ秋の夜のまく
たえしまて　右京大夫
いつはりも衣うつ世そなりける
かすひ松のしもしたれ
左近中将良経

思出る折たく夕への雲もなかりせは
こきやうすゝにたくぬ煙と

右衛督隆房

こしらふかいつのりしき色に
あかぬものと人のつらさにいとゝまさる

太皇太后宮小侍従

君こふとうかれぬる玉のさよふけて
いかなるつまにむすはれぬらん

二条院讃岐

あさことにのやこもとかりくさ

この世にはつましとおもひきのしかは

殷富門院大輔

あかつきをこひしきものと思ひしかとも
命ともなきあまりにけり

俊恵法師

君やこぬ我やゆかむのいさよひに
たのめしことのはかなさを

登蓮法師

物おもひとかくもあらて
ありけれは月の光の夜はの

月前恋といへる心をよめる
なけゝとて月やはものをおもはする
かこちかほなるわかなみたかな
寂超法師
久かたの月ゆへにやは恋そめし
なかむれはまさるわかこゝろかな
恋ひとゝいふことをよめる
頼盛法し
つらしとておもひのうちはうらみつゝ
うきをといとふかひなきもの

崇徳院
思ひやる心はかよふものなれと
うきかなにはえへ人もつれなき
源有房
おもへともおもふかひなきわか恋は
うきをとしのつねなかれかなしとも
惟宗広言
たのめしも後のよまての契りをき
まことまことゝりしのひけるかな
源仲綱

伊と[illegible]
[illegible]
[illegible]

鴨長明

思ひあまりうちぬるよひのまほろしも
なみちをわけてゆきかよひけり

絶て[illegible]男の思
[illegible]

[illegible] 土御門内大臣

[illegible]

つき[illegible]
[illegible]

[illegible] 皇太后宮大夫俊成

[illegible]
[illegible]

右京大夫[illegible]

[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

うらはまてにしかゝる波の

皇太后宮大夫俊成

おかま山深いつもきぬのもの妹春
みさきの道よふかみよ人思ふ
志ちろの風康のめ面はも
無いなもちをぬ橋まて有ける

藤原清輔朝臣

秋夕まのうるあらよつよ涙なる
うらゝはたえ橋よりきて

上西門院兵衛

是ちとかよふるの風の淀よさかれ
さつの乃のえくよ人もへ
もろこめかまる秋田乃ともかひ志
名乃ろめふめの由しぬなるゝめ

馬内侍

もくの葉よ秋山つる夜乃露
獨いのまんあるやいたもふ

和泉式部

うらむへきかつのまいろなからへ
ありきよりてしとらぬ物の雨

千載和歌集巻第十六

雑歌上

上東門院后にたゝせ給ひ
ける時よみ侍りける

法成寺入道前太政大臣

ありへし人のわきをいふなくもあるかな
たよりまつとやいはゝまつへし

上東門院后宮時屏風に松ある家
よ菊咲ける人の家に歌よ
み侍ける

大納言斉信

ねまへの竹のよゝのみゆきにきえ(?)ける
春のまつ風吹やちよのかけ

一条院御時皇后宮五節たてまつられ
ける時殿のかしつき十二人のうちに
つかひなれてありけるもとへこ(?)
きてかたりけるよ若菜といふ人の赤紐
のとけたりけるをむすひなんやと
いかてかものいひ中将実方朝臣
つくろひとそ足引の山井の水はこほれる
をいかなるひものとくるなるらん

ちとせまてくのまことにみえかはりける

皇后宮清少納言

うつゝはよもきえしなかにさもすなり
のとゝもりにけるまゝいつのまに

十二月はかりに関をたてまつりて
ちかくのまてふとにたゝまはれ男童
のひまは門にあまたやとみえ
侍けるをみてつかはしける

上東門院泉式部

たのもしとたのまぬものをたよりにはくちすの

のちのよとつゝる宮たちよふかしに

藤原実方朝臣のとの井不成に
ともまゝにして暁のわかれを
いける

藤原道信朝臣

いもとをみてあかつきゆくあさきのこゝろも
あなくしものゝかなしきに

二月はかり月あかき夜二条院にて
人々あまたゐあかして物語なとし侍り
けるに内侍周防よりふしてまくらを
かなとしのひやかにいふをきゝて大納言忠家

家これを枕にとてかひなを御簾
の下よりさし入て侍りけれはよみ
侍りける　周防内侍
春の夜の夢はかりなる手枕に
かひなくたゝむ名こそをしけれ
といひ出して侍りけれはよ
める　大納言忠家
契ありて春の夜ふかき手枕を
いかゝかひなき夢になすへき
一条院御時皇后宮に清少納言は
しめて侍りけるころ三月はかりに二三日
まかり出て侍りけるにかの宮よりつかはさ
れて侍りける　皇后宮
いかにしてすきにし方をすくしけむ
くらしわつらふきのふけふかな
返し　清少納言
雲のうへもくらしかねける春の日を
ところからともなかめつるかな
いかなるをりにかありけむ人のもとへ
のめかの房に枕のつまをあはせて遣はし

たかへよ年へてもあるとも晩とく出まくたく
きけつゝ見る　選子内親王
あひみんと思すことゝもたかまほ
つきゝみるよしもとゝめつる哉
選子内親王小侍従の君の心にて右近
の舟流よきつきて清涼殿の出車小
ねうとやまこえの日つかへる
斎院中将
あさまきさとしかもの心のまたらくまに
ゆかしきなしたよ袖いぬれまや

まつりの使よそへつゝならの宮にゝよ
里の斎院の女房よりつかはしける
前東宮亮郎下
そ年振ふるきのことのたひよすい
あふいくさ葉のまくらなれる
淨正尹為章親王のくしかはれて堀
寧陳敦道親王の逢橋とつつ
ていのこゝろことゝもりてかはれ流
かつりる
和泉式部
しはる香よみそるまれ八郡云

おのかやおかのし縁やしくると
上西門院兵衛のくちをしかるらむ
つきを見てかはらのしへ給ふ
御使よりて女房のもとにつかはす
八條前太政大臣
昨日まてあふにつけても川なとつかはすとき
きえのこりしもありことつかはける
賀茂のまつりにまかりて後鳥羽
にはべるかたの日蟹権守のいひける
もとよりいひつかはしける

なるまてついにはわかる
式子内親王
あふことはしるらむしらて
さかきの待ちや年しらぬ
右兵衛督袖のかはし
納言のみかはの前中納言なりける時
まかりたる時宮辞事ゆゑにまかりける
りける時のはにつかはしける
うつてつかはしける　右近太政大臣
やとせまりしてたのむしるあつせり

ゆくゑもしらぬこひのみちかな

[illegible]　中[illegible]

あかつきの[illegible]思ひ[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

経の六位[illegible]

[illegible]

[illegible]文の日[illegible]経の[illegible]

[illegible]　大[illegible]

此[illegible]

[illegible]

上東門院[illegible]

[illegible]女房の[illegible]

[illegible]

つま[illegible]　紫式部

[illegible]

[illegible]

二条[illegible]

[illegible]

住わひの昔の宿は板まもるかけ
八重葎あれまの宿の夜半の月のやとるるまゝ
よ女原乃ちとせのまゝの宿

前右京権大夫頼政

人しれぬ大内山の山もりは
木かくれてのみ月を見る哉

三條女房に致通世乃後扇紙に月かき
しもつゝ行きそへて行わかる

修理権大夫[illegible]

秋ことにかへて光もまさる月かけと思ひし小
木かくれぬ月のけしきもかはりける哉

月為友といふ心を

仁和寺後入道法親王

とふ人もなきひとりてゆふくれの月
見る人もなきそのかみのかたみなれはなれもちる秋
月をあはれとみるはよにすみはつる時なりけり

見月の歌

法性寺入道前太政大臣

さしのほる時や関はなけれともひくてもとめて
ねぬるよに月をこゝろにとめてもとめつ
あまの原のこる松に月をむかへつゝ

やとらぬ水のいろさへそかはらん

[illegible]　中務卿具平親王

むかしみし月もとふかたるあきのよに

ちるふ事もなくはあらむものをきえ

赤染衛門

あけもせて人もや今夜なかむらん

のこりなきわかれよりも月もとひくる

相模

なかめつゝむかしも月はみしものを

かくやは袖のひまなかりける

和泉式部

ひとりのみねしよもあらぬまとふ

人まつこよひの月をみそや

思ひやれはれぬかなしき月のいるをよ

たれかはしらぬ秋の夜はかる

久我内大臣

ありしにもあらすなりゆく世の中に思ひをき

かはらぬものは秋の夜の月

山のはの月といふもいりにしのとよくや付かね

皇太后宮大夫俊成

住わひて身をかくすへき山里に
あまりくまなき夜半の月かな
[illegible]月[illegible]
[illegible]
前参議親隆
[illegible]月[illegible]
[illegible]
月[illegible]十五夜の心[illegible]
前[illegible]
[illegible]
[illegible]

俊恵法師
[illegible]清瀧川[illegible]月[illegible]
[illegible]
賀茂成保
天の原[illegible]
[illegible]月[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
前[illegible]

ともすれは多在くまちらし月ゆかし
その事となくすくる空かな
前大僧正覚忠
ゆめのよにまよひてのまよひあらはるゝの
つれなきをまちもえても月あかし
俊恵法師
もろともにかたらん人もなき世にはいつまで
月はこの世のことを見しのわか
秋離をなくてよ月のみちとはかなき
月をなかめてよのこと何わかるゝ
源輔賢

あはれくもまつもこの世のくまはれは
おもかけのまちもえぬ山の端の月
月みえぬあまりの光なかはの暁にさよ
いつの月なかをそよ影の
源仲正
ありまくしとも世の中にまさりて
いとしよ月をまつわつらひの明
見月忘旅人といへる心を
ことたらぬ人やこよひまちわひて
源仲隠

いつまてと秋も月をなかめこし
百とせちかくなりぬる暁の月かとそ
見る　後京極摂政
残明をとふ人よりはなけれとも
見る人の月よりまさるかな
従一位為家卿家百首歌人
しらさりき待れし秋のよの月
みきとなきことはりつる
左京大夫顕輔
うき雲のかゝまてもおもはぬ

めくまふみそらに有明の月のつれ
冥西の山へしよりまたもまたなく
待わかる暁月のおもしろく待わひし
仁和寺後入道法親王
手ぬれ初る有明の月のかつりしちら八
見えしや山のは出まての
月のうらそくあらん人に待わたらん
左僧正行観
琴の音のきこえく雲によしふかきあはれ
月とゝもに夜半の更ゆく空のかはわ

権中納言長方

あつていくんかすゝまきいとゝおもひや
るふくよみもともるか月影

殷富門院大輔

まちいつる明る月にそらとまちにし人こそまたれける

藤原定家

いふかしなしとしてきもはしなかすいかに
たのみし月もかゝるおもひわ

藤原家隆

山のはの松のあらしもこゑすめて
誰か見しも月にきみ

藤原隆信

あまの河いとひつきしまね
なかき夜のあかつき月

法眼実源

あきのよの月のかけさへいらぬや
山の端にかくれむ

寂蓮

月とつるゝしらぬかほ

藤原家隆朝臣

ちりもなき月の光のほとそしらるゝ

入ぬるのちもなをとふ人ハ中々の

寒夜月といへる心をよめる

良暹法師

霜とをる庭のまさこもふるさとの
月はあくるやとはかへる人もなし
夜ふかきのしけき枝山まよわくこほる
こ人よつゆしかな

平実家

後の秋の庭ともなしにいるしのの松
月さえてこほりしそをる山の道

池月をよめる

俊恵法師

あつのいる井の清水くむなの
月もくもよりかふりまえける

水上月といへる心をよめる

藤原家基

さくしをは影ともさくもそはまさる
池の水にこほれる月影の

賀茂社後番歌合に月影

藤原親盛

ありとみえつるもなき袖のうへは
月のかつらに秋やかくらん
岸上暁霧といふことをよめる
大江公宗
よし葉ゆく尾花の霧にたえくて
あさまだきはつるの月もとかくるかな
山家月といふことをよめる
静蓮法師
あしひきの山の葉もるくまなきとも
まちつるやいかにやあくまての月

月照寒草といふことをよめる
紀康宗
もろともに秋やしのぶの草むらに
たれかのり露もしも見えて月影
月照山水といふことを
法眼長真
志賀の山の下なりやとや月そ
月とは草の庵もとしとはて
山の葉の月といふことをよめる
前参議忠房卿下

みつき夜のちよ成たまと余桂は
うくもくのほる山のはの月
荒屋月といふ事を
覚延法師
山風はまやのやぬしぬしかれ
まぬるつゝもやとるよひの月影
家にしるし　法印慈円
山ふかみこたまきるつゝあれはす人
まきの葉わくる月をこそみれ
月影の入ぬる跡はおもかけの雨

まかよりもすてゝやこのみかくまなき空
摂政右大臣家百首よみ侍る
つきみる暁月といふ事を
俊恵法師
このよにて六十はなれぬ秋の月
しぬるのちものおもひかすまし
月前懐旧　圓位法師
よもすからふけゆく月のかたふくに
おもしろやことゆる月のひかりまて
二条院御時暁月の心を人々よみ侍

かゝりてよゝに侍るかな

皇太后宮大夫俊成

みかのはら神さひ川とたのみにし
よゝにかれ雲井の月もたえさらん

藤河の流は清輔百とせもさえまさりける
延慶の御代をまつらん

藤原基俊

のちの國よまつらしこゝろよく
こゝをまつえしあらぬ歎をもやとし

律師光覚維摩会の講師の
請しけるをたひ〳〵もれにけれは法性
寺入道前太政大臣にうらみ申しける
をしめちか原と侍りけれと
又の年ももれにけれはよみてつかはしける
ちきりおきしさせもか露を命にて
あはれことしの秋もいぬめり
寛治とりつゝころさへことのふる付わけゝ中
よみける

源俊頼朝臣

世中のおもしろかりしもはなかりけり
ちきりしとへとやうきよとつらき哉

述懐の心をよみ侍る　覚審法師

色なりし心すみぞめの夢のまに
うきよりはいかの世思出なき身

経円法師

いにしへは明日のよそにかはりぬる
すきもせとの人しさつりひかなん

天暦の御時長柄
こぬへ橋の跡とやさすらへ侍
ける所　源俊頼朝臣

橋くちしたゝ思ひやる跡ばかり
なかれつゝしもえたつもあわ
なかれの橋の跡はまたよそに

道命法師

月まちしかひもなかりし年をへて
むかしなからの橋の名の

覚円法師

思はれてよる
くるみつゝたかつの橋はなきかことの

津守國基
わしつみもかはらぬなからの
津守國基大阪の国より上り侍

こ滝をよみ侍りけるにかゝみたと金
して見えよりまさりてゆかりし
人の心のうちまて見え侍りかゝに松の
もとをものけて書つゝあはわかれ
清輔朝臣
人のおもひはたゆともかれにし長
松のみかはりつとゝのまゝかわ
よし野の滝もとゝろに見え侍りける
中納言経忠
白雲のよそめのみやとまし吉野山
あらくしみたえぬ花の音もとゞわせか
その名大空まてはきゝわたりける
のこりなく見えて侍わ
りける
大納言公任
すゞ花の音はさてなかれ侍と
たえてひさしくなりぬれと
名のみ滝あまつゝる所とよさなる
前大僧正長賢
吹くしもかぬすかひつかはしてなかれ
しらあわあまつるたえ花のしらぬ

京極前太政大臣布引乃瀧見に
まかり侍りけるに
六条右大臣
水のいろのたゝしら雲とみゆるかな
たれさらしけん布引のたき
瀧をよみ侍りける
はへりける
俊恵法師
みなかみのそらにやあるらん[illegible]
あまのかは[illegible]
日影[illegible]

菅原[illegible]朝臣
山人のそのしのあともたえて[illegible]
[illegible]風もてつくる[illegible]
布引の瀧をよめる
藤原元清
立よりて[illegible]
[illegible]の瀧
宮の瀧をよめる
菅原輔昭
たちよりて宮乃瀧乃いと[illegible]
いはまつきとめおもひちるらん

藤江の浦晴るゝなきさにわたつ海のをりあはす日かけの
なみとよりもある
菅根やわすれしものをぬ松の 大納言師頼
くもゐにみえつゝしてもそろわ
同浦晴るゝ人のおほかることも頼もとこそわ
なつみつゝまつわたのはらつゝまちまとと
なきとよみ仕ゆる 権中納言俊忠
いはゆるのふえの明石の浦に伊勢の海
しもしをたゝ小のふまねのあまのつかふ
ろそなふみに松をよみある

玄葉の浦 いてこの海の島よまより 晩頭大史頭兼
いくよふゝきいりぬふしの浦にめかん
方春せんともある 源俊頼朝臣
さほの山にては 聖済ありやえとうゆる 蓮
なうこ浪の梅はまたぬりゆきあき
庚同 社頭云合とて人の行仕ゆ
晴海上眺望といふ心をよみ侍
ける
権大納言実家
ふなよそひ秋のつゆのふ山松葉やも

見しまゝにかはるもの〻面影よ出もあへん

権中納言実家

情ニ入る浪まの晴見よとも見えけるかな

あまのはゝ雲井の梯よりかゝる覧

大宮関白實

つるくとおもへのおもひとゝかるらんは

雲井よりまきの海望の錦子

眺望の心をよみ侍る

兼玄法師

あまのいるさをあらみつまより見え浦ほそきは

のみよりのみかなのつゝみ毎

郭公 有家業經

まつ宗ちの行水とさとこゆるめ小松

なつくものくともしろくしぬかな

和歌の風ををよみ侍る

経部朝仲

花くとしいさまたぬとおもふや風の

おもひつまもとぬれの乃

うしの雨

千載和歌集巻第十七

雑歌中

五十法賀たまはりける年の中ゆるさるゝ
殿の桜の盛りに侍りける花をも侍りける
よみ侍りける　前右兵衛督
心あらはいよもひおかくとよもくもを
後のよはまたもとめてこそのみつき
なほしまれつゝ
前参議教長
わかよはもとうつしはいりつ桜とも

うきよをはたまてしかへるみつしかは
僧都頼実男法師にて侍りける後の年
の暮侍りけるに遣しける　たよりにつかはしける
よみて侍りける
僧正覚範
みもともなしともしのしつは方へとも
ぬしもなき花にはちるまてはわれ
の子孫あそみて侍る東山にまかり見る時
侍りけるに国城寺のもとかもしみ給
もとみてそよくて侍りける

前中納言基長

いにしへの[illegible]さくら（山桜）
[illegible]

道[illegible]
皇太后宮大夫俊成

雲の上に[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]関の[illegible]
[illegible]
[illegible]

あまる[illegible]
[illegible]
山[illegible]
[illegible]
[illegible]大納言[illegible]
いま[illegible]
山[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

ふるき事侍りける比によめる　和泉式部

花もくのぬ宮はへにこしもなきまし
悔しくも梅をおもひしよりの風

ある大納言公信長谷にまうで一夜籠
みえ侍りける時つかはしける

法性寺入道前太政大臣

たかのとももとよもやえへつる常陸
まつりこときとしよものさくめる
山里はまことにしめて侍りける比家

ほとゝきすのわかるゝよ人かよはれなん
ふるさとはみえけり吹まさりける

道命法師

あかきそへたは我あひまたの奥山
君こそはめでたくおもひしを月影

除目の比つかさ給はらて歎き侍りける
比範永のもとにつかはしける

大江公資

年ことはあまたの人のよそなへとも
身はうけまちぬ梅はまつ有ける

寄露述懐の心をよみ侍る

源仲正

おもひかねなけきやせまし身をとしれ
うきよの露のつゆも安くわせは
世の中は後の世ためしもあるまし
とみ侍る

俊恵法師

ちるをまちて見るへきや櫻花
もろともにのりけるきしをなき人
毎乃讀あなる讀何わたる時る
めるを

花さかりの心のいろの露なき世
まよひしよそともおもへとも
佛にいかにしてもなるとも
その後のまいる
いまの後のよのもて
よもとひをせしのとしみて花を
みそれなる
この世にはおもひのこすもしそ
むかしをよそにしつ

寂超法師

ならひにしき
世の中をつねならぬもの思ひしは

いそくの海のもろこしうつるまし

物まうのまとふるをけりて又の年春
白河に花盛りに女のまゐりたる海後
すまゝとかよしはすゝてよみける

よみ人しらす

あかなくに心はいかにとくせのまきしをかれなしと
もろく桜はちかなしとおもひけらん

花の盛に清水にまうてたるに　金

世の中はなかれのきえしひとつ
後はわかるゝ

皇后宮大夫俊成

物わするゝ色もいさきのみ桜の花
もろきまのくもりともなしといふ

依花待客といへる心をよめる

源三位頼政

山桜うつりをあかすしはしもさへ
人のまつ花さそふいつの春のはい

園城寺の花のさかりに僧正行尊
のもとにまかりてよみ侍る

いつかまたあふ

風もなきをたとしへな

菅家

まし

よし野のきゝもさくらなりけり

花ちらぬよそ 源季廣

ぬるく思ふゆめのうちにこそ

みちのくのやまかけにとなりて

かけは桜をもとめてみぬ人そしるらむ

源師教朝臣

花の色をとゝめもあへすうつりて

おしむこゝろのかはりてやとおもふ哉

三条院春宮の御時権亮に侍ける

のちも花を見て殿上人にて侍ける法師

ことゝもに人にもしられぬよを述懐

詠ところにかへりて侍ける

権中納言實守

くらゐ山もとをもとよりよろつよの

まちわひぬかへるやまこそいつとなき

崇徳院御時十五首うたよませ給ける時

述懐の心をよみ侍ける

右京大夫季行

春日山松にたのみをかくるかな

ふちの末葉のかすならねとも

なかるゝ事はかはらぬよのならひ
前右兵衛督公光
物おもふ心やいつもさかるらん
うきよのほとゝきすいまそなくなる
百首哥の中に述懐をよめる
俊恵法師
かくてさはみに経ぬる年もなくしてそなき
よもすからしとたにおもひよわ
円位法師
そとをもゆへのかきりはつれなくて

むかしいまたもおもはれやいきとし
述懐の心をよませ給うける
しら河院御製
思ひ出もなきなる身こそ
いつへもなくこよそのしはなく
おもひしもなきに
二條院讃岐
藤原家隆朝臣
あはれにも人もなもとりとも
そのまゝいつといひつゝ

行春山桜狩人のあかれ 霞立春の山路の花の下ニアリ
散かかり桜かり 桜ひちるとも見え とみえよあれ
霞立の春も思へぬかなり

右大将実房中将に侍りける時十五首
歌よませ侍りけるに述懐の歌とて
よめる　　中原師尚
かはらぬみをもなげきて雲のうへにしぬなる
とゝものはやみぬ几はいつとも
学問料申しけるを給はらざりける時
人のとぶらひて侍りける返事によ
みてつかはしける　大江匡範
思ひやれまた十代にもあまりけるとも身の
かくまよふみちのゆくへにはつかしきこと

題しらず　　藤原公重朝臣
よのうきをおもひしのぶと人しらよ
あはれとそみる谷の杉のたかきを
　　　　菅原是忠
えらはれぬ人もたのみてもをまとふらむ
かゝはつよきの花ものひかすわれわ
　　　　二条院参河内侍
いのちをもをしまぬよしもとひよるへ
むかしにはつるかみもせまつらん
摂政右大臣の時家の歌合に述懐

ことゝよなく

源師光

いまはゝやいくよしぬらんあまのはらをとせ
なまじゐに夜半のみにまつそらのあけ
つゆけさに伊勢のあまりわかるゝと辞し
やかて暁の大空のけしきのみ行まよひ
そらの

源俊重

あすはさとせいをのみそよ秋のかせふき
おもひわびかのすゝきのそよくにふ
田上の山里り見る庵わかちたち風
かゝる宿ぞ

源俊頼朝臣

吉野の花もさかりなるらしはなの
とふ人もなきをもかしわかたゝかる
山田の庵まとひまの花の立ちみもとる
かる秋

播磨長

小山田の庵の夕ぐれにかきまよふ
たゝふみもしきもやそふ心
堀河院時百首哥よみ侍る
山里の松かけにもよる風

二条皇太后宮肥後

山里の寂しさにつゝうきよの

人まねなとてよしなしけるの比
長月のつこもりまて梅か見えて
たかしらぬまかにほひみえてたとへ
人のもとにつかはしける
菅原孝標
梅か香に松虫の声のなきのこる
あきもやなをしやとるとへへ
女のもとよまりかへて月のあかゝりけるに
よそにのみ雲のうへなる月みても心のやみは
なほそはれける
藤原道信朝臣

こよひさへいもとへいかゝほとゝきすあけぬる
よそにこそきけはなれぬ梅の花
おもひしまて　和泉式部
たえぬるいのちを何よりもとしぬ
かしたる梅いつそれよりまさる
紫式部
うちすてゝ心よりあやしきまきて
おもしろきふしいつくゝれなれ
こよなきもの花のおほえぬ
様のもとよりつかはしける

後京極摂政

あはれにもたまへるかなと思ひし

たのみきてたえにし人のかへす

前大納言公経 もみぢにそ住わたる比

見るをしのへるなる 夜の秋のつゆ

中納言定頼

なへの枝のまはれ風にふきしめしつゝ

谷の月ありもとおもひそや秋

夜

たえ風のふきよしえことしかるへ

前大納言公経

このもとにまよひ思ひの露をきつゝ

前大納言公経 入道 住わたる比をしき

住わたる時雨物思ふに涙も道

住わたるとそつゆしらまほしき

法眼入道前太政大臣

住よしの恩のみとなそやとしきのへし

くもゐまさしもなきのまつしるを

夜

入道大納言公経

松のしたしきつまのあきのはまより

住よしのうちにもよしみちをしめや

おなし年の人々よみ侍ける
三條院の御時殿上のをのこともに松の枝をおくり侍
けるとてよみける松のはつかへつねに
しも庭にしつかはしくつねに石にこそ
たちよる藤のはなのさきかゝる松の
えのなきにこそ侍つれ千代まて
かはらぬ
弁乳母
よし見よやしつえのしもとふりまさる
花のしたにしも松のはにちよのかをりて
一宮禖子内親王の家に歌合し侍ける
冬かれのゝへのはらをとことはにあさ
ましかはるそのしはしはつくのみのかは
輔仁親王
山里のかすみのたちこめてまたえしき
ものにもあらぬわかしたのこゝろに
禖子内親王
はや
やまさとにのこるきくさきかよくかくれとも
ことはひろのゝのとかにまちまつ
大納言實季卿家に卅六人の集をと
りつゝけしさる中に左大臣殿右

大下乃まへ伝はりける双紙よりはしめ本
しらけ難き伝はりける
大宮右大臣
其外もとにの手多くあらはれとを
わか身一族乃人々より多くあり
在
権大納言実家
これもとよりくことに葉をとりたる記
たのみうしけ乃大事乃うつまゝ
三条殿のまへ伝はりたる陽明山院よ
て源伝はりける
仁和寺法親王

被るて其もとの伝へきたるや
況もしこなり秘をとかわ
達懐乃うたをたふ人伝はりける
思う道乃みやこいひともみわたる
いとひやまきいふにそわかわ
大峯をもとをつまゝ伝はりける時まし岩
風といふ所よりえ伝はりける
東大僧正覚忠
虎とのまゝになり光右座乃岩方
いくよよみわたりのよつきぬ

述懐乃こゝろをよみ侍りける

大納言宗家

身乃ほとをおもひときつゝもとしへやまし

かゝらぬちえなるかさしゆめれと

右近中将忠良

うちつゝやまとねぬれいさゝれもとし

うきよをはいとゝふきたつめつゆのみに

二条太皇太后宮別当

ほかりあれはのなにのうらみにいさきたるものを

みよもしらしくしも乃ゆめのかたちうきまてはわか身

右大臣家乃百首に述懐乃謌よみ侍ける

有家朝臣

もとのつゆおもへはいつれ世のなかにさきたつへき人

おもひとも人はなにくれかきゆへきの

宜秋門院丹後

しとかもいとひもりそよし世をかねて

あつくさあふくおもひさこまて世を

歎之こゝろを

法乗倫宗

乃ほりぬへき道はまよはしふかくとも

こゝろのわかれくのしるへなりせは

十月に三年服はてゝ侍りける人の
年のはて侍るにも加階し侍りけるを
きゝ侍りて　中納言長方
もろ人の花をそめてよろこふに
なほそしくるゝいまひとつの袖
返し　前参議顕方
うすきにもこきにもいろはかはるとも
なみたはおなしすみそめのそて
返しつかはし侍りける
もろともにかへる衣の

かたらひける人の月も秋にもかはらぬを見て
て故の人のもとにつかはしける
前左兵衛督惟方
この世にもしはしとなきかいかにせむ
なほ秋しもわかるゝ袖の秋
夜もすから袖の色とは思はさりけるなよ
める
宮内卿
手くりのあまもうきにかへれと
かもよなれしはきよかとよ
いのちの秋かなきつめ国よりも

つくしにとゞまりて京よりのほりけれ
て後日吉清拝よみて侍ける

平康頼

思ひやれしばし旅の空たにも
なほふるさとはこひしきものを

遠僧云々わかるゝ時

登蓮法師

あかすてもいつまてよにすみわたり
まつへきことのあまりあるかな

陸奥よりのぼりけるとき

覚雅法師

おもひつゝなくさむかたもなくてこそ
あかしてもこゝろにのこるいそのかみ
ふるさとかたのあはれなりけり
かへるさ

権僧正永縁

夢とのみ思ひこしかたはるかにて
とをきほともいつしかと
いつとなき事のあはれをかさねても
ゆふくれかたの人そこひしき
きみつけ　こゝろ過ほとの秋

これまでは雲の林に出しかな
いつまでとなき人の松の人まつ事は
たゞしばし世の人しばし
うれしとも思ひしものを見はてぬ
ところもしらぬ夢の名こそをしけれ

紫式部

なにとなくも見ゆるやふるさとの山しば
しとけなくしなけれどもなけぬるはなかれ
逢坂の夢の關とぞ
皇太后宮大夫俊成
あはれ

うき身にはなにとなくものかなしくて世のなか
こゝろにも物をいとはゞ世をいとふ
なきてふる世のつらさをなぐさめは雨の中の
知とはなる

前大納言通親

うつゝとも夢ともわかぬ世の中に
夢はしもはかなきものゝとはいへと
いとひても猶惜しき身のならひかな
こゝろひくへきこの世なりけり

上西門院兵衛

これやこの松ある人のまつちかき

思ひわのそこともなみのへきの雨

花園左大臣家小大進

あはさつゝねる室乃岸乃稚草
たかねより小よのあかしもいろし雨

前大僧正慈鎮比嶽にて大峯にまゝ
かわ入て神仙といふ所にて金泥法
花経のうきをうつしをきて埋侍るとて千日
のわとあきて付はかりつゝに房覚之雑
野乃方ふわきのわかつゝにも付はるへき
はくゝせはわかつれ

大納言成通

わしらぬ命をとしにかしまさて
君かのへやこよ陣わくるまさ
夜し　前大僧正覚忠
うきせをいとゝ入りしをもし
君のとりつゝやそへんとまん
園城寺水辞といへる所をよみ侍る
仁和寺法親王
岩くゝる水のわけつゝ不可思議
かしはのとつてまちてまつゝく

二聲にまさりて侍りけるにおもひの庭
に寂蓮法師か庵室にまかりたりけるに
ひさしく物語して侍りけれは侍りけるに
てつかはしける　　攝政太政大臣
たましひも見えぬ宿のすみかのしと思はせは
ありしをもわしる草の庵の雨
秋の比山よりほかにて楠の介安楽
乃五條乃もとにまかりけるに小正
法師乃陰よりよみてつかはしける
前東宮衛門督

なせともまたにのへふたちまちきえかゝると
こゝろのうちにわすれめやたれ
数ならて　　法印慈円
おほけなくうき世の民におほふかな
わかたつ杣に墨染乃袖
寂蓮法師
とこよにもよしとゝまりてそむきたき
もとのまきるゝ人も松乃風のは
殷富門院大輔
つらくしもたちかへりの別しあさのゝまへ

[illegible]夢[illegible]有明の[illegible]

西行法師

[illegible]

[illegible]ける

六条院宣旨

[illegible]

[illegible]

[illegible]思[illegible]人[illegible]

夕[illegible]

二条太皇太后宮式部

[illegible]

[illegible]

[illegible] 宮[illegible]

大井[illegible]人[illegible]

[illegible]

[illegible]東山[illegible]

[illegible]人[illegible]

[illegible]

[illegible]京

[illegible]山[illegible]

こゑのまゝにいつるへきものを

題しらす　　　法眼慈円

ねをたつていとゝ庵の萩はすき

つれなくもおもひいてつゝ秋のよは

賀茂社の歌合に述懐といふことを

寂蓮法師

なれなれていとゝうき秋の

思ひしこともいひいてゝやは

山里に蕭の侍わひしくいはれは

まはらなる人のいつる世をまつとは

ひとはわかるゝ秋はいひつゝありにふ

覚俊上人

よもおきまさる草の庵に里遠の

こゝろもの人まつよこゝろもかのみ

源清雅九月はかりに夜のふけゆく

まてはわするゝを人のとひて侍けれは

返事をとふとや侍りけれは秋の

つかはしける　　　源通清

思ひやるよそにつゆめ山のすきてくらみ

袖ぬらしつゝ秋の月のあきかは

寄し題　　俊恵法師

暁のあしまよりたなびくのうきにそらもゆかし
ころの月(?)うきこたへてゆくや
いつまでかわれのみをくたきまし(?)
うきよにぬれにしやまさきのわかれ(?)

保延のころほひ述懐百首哥よみ侍りける
侍りける時堀河院の詞(?)

皇太后宮大夫俊成

在明よはそらにすみ秋風の(?)
山のはたかくしらるなる

秋のはしめそとかねてしりけり(?)
藤原清輔朝臣
おもふことありぬるほとのなかは(?)
なき山のゆくへもしらぬわかこひや
たゝしはしとて　藤原隆信朝臣
見ゆる風のつまにもさとるゝ(?)
こゝろなきまつにもしられぬわかれ里(?)
大宰大弐重家入道
山ふかみ霞なまよふたつ(?)
藤原有家朝臣

いつも山入道の館ときゝてたてまつりけるは
むかしのともとくちをしくかたりて
春日参向ありけるに道すから文の
木下の葉散前の花のちりて見
侍るを見てそ前にまいらせて侍りける
いとしなると思ひ出てよみて侍りける

権中納言通親

ちりつもるこのもとのうへに桜花
わたしぬるかやしなれぬらん
此歌ある人侍て後中納言雅兼

まだ小男にて侍りける時はじめて昇殿
ゆるされ侍りけるを拝してよろこひ申侍る
ころ雅兼のもとへまいりて教へかはせよ侍りけれ
は

入道中納言雅兼

君か代ともにゐるらん石清水
くむにもつきぬ
こけのたもとのきよくも有るかな
昇殿しを侍りける人のもとに
侍りける

右京季経朝臣

うれしさもとよくのつの袖まさりつる
ならの人のまとわる男のもとにいふつる

今上乃御時五節乃頃侍従宰相宣旨局にあ
やまもとあたりよめりけるあわ
て殿上乃人々仰わかるゝ人年
も若くよめる又乃としはゞ三月乃頃
されたる程よ侍ける歌よみ給へる人へ
きこしめし太政大臣定長のもとへ申
侍わかるまじくて侍りける

入道皇太后宮大夫俊成

あはつの雲はなれもしらず落て
雲まよひやたえてつゝ

けふもあはれし侍ける人いひのこしてあは
きのこせおかまほしくてつや還昇
侍ける人あきらかに侍ける
心ひとつをよしぬる事ありもつまれ
と侍りけるとかやきこしよそて侍給ぬ

前京定長卿下

あはれなる霞もえぬるゝるあわ
まよひしかはけるやつるゝなれ
入道乃侍ありける昔乃我代ゆかしきを
ふるさとかな時乃人々侍われ

千載和歌集巻第十八

雑歌下

短歌

堀河院御時百首歌たてまつりける時
述懐の心をよめる

源俊頼朝臣

もかみ河　せゝの岩かと　わきかへり　おもふ心は
おほかれと　ゆくかたもなく　せかれつゝ　底のみくつと
なる事は　もにすむ虫の　我からと　思しらすは
なけれとも　いはてはえこそ　なきさなる　かたわれ舟の
うつもれて　ひく人もなき　なけきをは　波の立ゐに
あふきても　むなしき空に　[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]　[illegible]　思ひ[illegible]
[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]
吹風に　[illegible]　[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]　宮[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]　[illegible]　雲井[illegible]

かへるとも たまふはのすゑも 久かたの 月のかつら
おしむには うきよのものの 咲かゝる いかなることの
いはほとよ 四方の山へよ ちりかけて こゝもの紅葉
立まゝを うつゝ隈の 植そゝ色 花のなかとよ
わきかへて 隈の世をかな とおりくゆ おもひいとく
ほりけりて いつ為ぞ方も まとつかみぬ 手数きみの
つれつれて 又よりの葉を わかたれは いはしのすゑよ
あれなれは 今はまるさて いひつまれ いはのまよ
とゝめさす なとへいひわ ちよりしへて 過つしいわ
またてたり 松のなる覧 なかりて 何まほし猶は

おほよそし 変もいし 冬の梅の 色花のまかなり
庭なれは 嵐さそふは山 またすてさ もとかぬ下と
あわれん 鐘といつと さるまえへは 花かとうは山
さるかへき 手かれ寺は おかみて ちる紅葉ふる
住みしえの 志はなかふ うつをえひ うくころも
もえそこ 有りも取る よふかに もとつまつる
見えし吉野の 峰の花桜よ かきのつ まきにまかう
なかりて ちるさその松の つらりと いろつゝと
のねつなくそ 見し枝れん 松くまれ 人のたちりは
をかつゝ きかりは季 あちりも つゝ雨ちまも

雲とりの あやにふるまひ くもゐには 足もとよりハ
見あけしも 柳の下に うつもれて しけはつけりし
はの園の 生田の森の いくよかは 森の木の葉の
くちはてし 何をかねて なかなかもりん

石上の

左中ハうき 身よそへ 親王や
おもひも とつ世とは いはしとも わ
ちそて ふるめしつる 時に作 給へる
出家後清涼殿
きよしまや 大和の宮に つくりて 事ハつるまて

久かたの 天の川原に いまかへて 見えもせぬ
ちはやふる 出雲の宮に やくもたつ おもひまいらせ
さゝのはの 夕世の色を もえ出て ことに葉のく
ちるまくは 風につけて きこゆれハ ちりまたかは
海のはの 流れて ならへ よわくみ
思ひつゝ つるかしとハ 夜るとも 詠めまよせて
とまりと 思ふとも つの流 ちりて浪の風に
ちるまにて よるへとは いつれか もしやのは
おもへとも うつらもかの ゆきつゝ ある
日の清時にて ふるさとへ かへらむ 前の頭

待賢門院堀河の

昨日しね 谷のこほりも解
くもりなき 青の海原
庭もせに ほのやなきも
松のは をかりしみ月は
ひかりそ 時にめぐるを
独のこしを きたりふる
あまたる色も 衣をうけて
とふ人も あとまたるふ
つまよりの 濃かりし
よそに猶も 君かまちかね
流れかわ さえも焦も
松のかをり 松の千代の
すまのへは 松はなかれ
露しと 情有のくす
とこのめぐみ ときくの葉の
たのしむも なでしこの露は
なすをしと 布流の枝は
さのたきに 笑めのしつ

まれなりし 紅葉の露に のこりやと 老人のきつる
たちぬれば とへかし 唯くしつ 霰のかりては
おもふへを のぼりぬる 水くきは 流しこめる
かきまぜふ ちらしの名を とりあへ うつねや
なにへともかも

旋頭歌

下從のもろまさのりまへるもを 任ワてこ
かはわたるつひは 濁酒 程しつ
とふつつける

原伊正

東屋の尾への木たちを わくまとひも

君まちてわかハかたみにたゝるゝかげをやすらへは
在し　源俊頼朝臣
わすられてよるのつきにもなくさまし
恋しき時ハたのみてやみんと
ろくろ(?)にてかくよみたる旋頭乃んハ
もとよりある
左京大夫顕輔
東屋乃軒端のをきにのこりける
あふひのねにしも(?)かよひなれける
折句ニ云
二条院御時に花といふことを五文字の
句の上にすへて旋頭歌によめる
源雅重朝臣
きよくすへてもとのおもひのはての空のみ
しらさりしよるのまくらのおもひしらるゝ
なとしもかく乃五文字をはしめにおきて
旋頭歌をよめり
仁上法師
あふことをおもはゝ物をよしのかりけるかな
よるもひるもこゝろにそあるまへをたえぬ思ひハ
物名

五月雨をよめる　　和泉式部

おほかたにさみたるゝとやおもふらん
きみこひわたるけふのなかめを

中納言定頼

[illegible]

大貳三位

榊葉のゆふしてかけしそのかみに
おしかへしてもにたるころかな

二条太皇太后宮肥後

[illegible]

源俊頼朝臣

[illegible]

よしもはおもひけるかなと（も）
ふかくこそのちさきあるしの
とまりつる
　　　　　刑部卿頼輔母
秋の野になきまとふむしのねは
むしのねは萩もみえぬよるのひもなし
ろちもちのなきへまかりけるのかく（抱あはれのう）野
のきのよもしもと
　　　　　待賢門院堀河
萩はおのれ雪もまたはいるかな
いろしきもなつかしくのわり
　　　　　僧都有慶
あきのこ
いつはりのさすかまつの枝のはにあすも
あきのこゑにつらくのにゆかしからは
かきりなきのいろ
　　　　　登蓮法師
なにしおはゝつねはゆるきの杜にしも
いかそのときのかいやもとめつる
誹諧歌
花のもとにかへらむことをわするる
　　　　　道命法師

夏やしきも菊の花はにいたりのもの
おもひよりもみ人やいのちのそ
卯花をよめる　源俊頼朝臣
うの花よいそことくはけ海
たつとしとこゝろはちえもとこし
五月五日菖蒲をよめる　花園法師
ふくかふ旅よせてゑやゑ華
きくのみかもとりよめすとしるしや
ともちをよ源

橘俊綱朝臣
ともしてくらまの山よりいつるわ
かるわかよわかあふと輝まに
六月の晦日によめる
おもてある
紀貫之
夏のよのうちやくれなゐはたちまちかねて
をとゝもふるをかなるもの輝から
越之てみ
惟仁親王
秋のくる雁は橘のかきしろくあきを
ときかすつゆるともなかにさかん

萩乃花乃色とも人乃枝ことて折れ
をしきつむしなきわかれぬ

前兼為朝臣

分乃衣もみるかへりみて月かけは
萩乃うらはゑた枝やとへまし

崇徳院よ百首哥たてまつりける
時秋乃歌とてよめる

花園左大臣家小大進

つゆ明かし小野乃篠之上の露を
やまいちしらすをとめみゆる

野花も見て道よとまるといへる
心をよめる

僧都範玄

あちらまえと〻るい〻る舟めらも
こよひは萩乃けやとらん

九月十三夜よめる

賀茂政平

名乃あきらこともふもやら月影は
十夜よあまわてかんとてあはれ

満我方他恋といへる心をよめる

顕昭法師

板ひさしとまやの庭の時雨より
おとしおともなき方ハ松かせの秋
君か住池の時雨ふるさとさへかはる
時雨の袖とそなりぬる

藤原基俊

笛竹のよ明なかきよしのゝかすみや
あつましや名のみなりけるかすみを
旅の道　　源俊頼朝臣
志ろたへの遠山のやつこの旅ねよりも
あはれくさともなりや夕とは見ハ

ふるさとをよそにわかるゝ時雨の雲そ
なかめ侍　　待賢門院堀河
あるこゝろもあはれとおもふつゆくさを
とゝめし人のこゝろのかよふまてそ
六波羅蜜寺の講の導師にて何事
まゐりて花小野かへりけるに女房のもと
しもをつかはしける

良暹法師

人のあるものをつむとき心もまよふ
嵐ふくをくらのもとに松のみそなる

山寺にこもりて侍りける時人のもとへ
ちとせひく流れして侍わかれしいふきて
つかはしける　　　　宣仁法師
おほつかなやまちのはらの丸木橋
ぬきとひみるひとはあやふかりけり
賀茂社にこもりて侍りけるに正月
つこもりにたてまつりける
てらきよひわたるかけてふなり
しるしあらはこそ(?)
とらのこゝろにいひ(?)

てこゝろさしをつかはしける
　　　　心覚法師
ふくたひにこちそふことふれはおもひ(?)
とをわたるにはさらに(?)有ける
東へまかりけるに八橋にてよめる
　　　　法円法師
やつはしのわたりにけふもとまるかな
まてよこゝにすむへきみかはと思へは
女をうらみ侍りけるをさいつ比あ
ふみしきことわかおもひたへて

よに侍りける頃
　　素性法師
つくしとそこそハよしもあしやまのまき
ちりハさきてつるよしをわかとし
なの依絶乃小児乃文字をかきたるに
あはれて十五にて侍りける時おもひて書
侍りける
　　源信僧都
かゝりきたるにもしハあとをはらふ
うしもかもこそたちはしめや
山ハゆきとこそちりし時のうた
かゝるをもしやすくなくなる
　　赤染衛門
かすもまた年のひさしくすきぬれと
むつのあはれもかはらさりけり
影さへもなき
　　空也上人
極楽ははるけきほときゝしかと
つとめていたるところ
なりけり

千載和歌集巻第十九

釋教歌

維摩経十喩に此身如水沫といふ心を

よみ侍りける　　前大納言公任

こゝにきえかしこにむすふ水のあはの

うき世にめくる身にこそありけれ

如浮雲

[illegible]

[illegible]

三身業とて歌よませ給けるに心をよませ給

ける　　花山院御製

[illegible]

[illegible]

法華経薬草喩品の心をよみ侍ける

ける　　僧都源信

大空の雨はわきてもそゝかねと

うるふ草木はをのかしな／＼

菩提といふ事よみて結縁乃為し

ける時勧進せしによみ侍ける

人のもとへわたくしにゆかねはとひけれは
いひつかはしける　清少納言
しとのそしものふる道のしるへせよ
うきよにはふるかひなるしはのいほ
後冷泉院御時皇后宮歌合に
春とも秋ともわかぬ月の光をそ
よめる　藤原國房
月影の常によそなる山の端と
なくさめつる雲のうへの人
寄月念極楽といへる心をよみ侍る

よみける　後河入道太政大臣
入月をみるとや人はおもふらむ
心をかけて西にむかへは
天わたるはるかにみえし舎利ものを
いつしかわたれる
勝命上人
萩つき焼はもえくるとわかる
こもりやすくおもふとも
清嶽にまして侍りける清道の證
西法華経のをはりのまての法山

さしてきまよへる人をわけはてゝ
暁思ふ心やはれぬる光に掲けてまつはたえ
おもひそはれぬる　前京極殿卿下
夢ともめざめし人のこのうきことを行ほどの
やみもしらても世の月ぞ清の光ものこの夜
あくまではるゝこの西山に入らん
おもひのわりなき事をはなれなば此の身ぞ
あはれそこなる人をまつとなりける
三十三所の観音をかしこまりなん
ともやしとまよふ人つれわらる暁の蓮の

さゆくひかり雲の月のをとこそまとゐる何
まよへる
仏　前大僧正覚忠
夜もすがら仏の道をたづねみむ我人
まよへる行末もしらぬをまよへる人の里
あはれにも近くの観音との近く
みちのまへこそ浅からぬ御法あさき
今まよひかはるときはいとゞ木もへは
提婆品の心をよみ侍りける
僧都覚雅
その時ぞまつりし心ちかひしも水にやなかれ

こゝろ乃うちと思ひやはしらし
陀羅尼品受持法華名者福不可
量何況擁護具足受持しはまて
ち誦して持経者乃法師乃たつ
ねしも侍わくることともいとゆかしき

前大僧正慈鎮
まもりくるちかひもたのもしなよるひるも
法のはなの花にもはなれさらなる
阿弥陀乃十二光仏乃法名ともを侍れ
くさ々に智恵光仏乃心をよめる

源信和尚
仏人乃心はさらにもとよりくもりなき
さゝへやとくとまつ乃光たるらん
百首よみ侍りける時普門品弘誓深
如海乃心をよませ侍りける

後鳥羽院御製
ちかひおいてふかきの海乃たゝへたるふかき
たすけしたのそのまつにて人ふかん
同百首乃時花厳経乃心をよめる

前参議教長

いかなれハ三世のほとけと思ひけん
こゝろひとつにまよふまとひを

即身成佛のこゝろを

てらす月のひかりの水にすめハこそ
やみのそこまて光さしけり

法華経信解品のこゝろをよみ侍りける

前大僧正覚忠

いつまても今はわかれぬ法の庭を
こともいひしりしかなしひけり

色に法　入道法親王覚性

てはわかるゝに道まよはさりける

崇徳院御製

山の雪ハ谷のかけちもうつもれて
こゝろハふかきほとけの法やまなふらん

佛名を　仁和寺後入道法親王

てらしまそ三世の佛のなをきけは
かはる様もなくしつかやすき花乃に

臨命終時法文のことに普賢の
願の唯此願王不捨離といへ
ることを

式子内親王

なにとひとつ里にかゝる松かけのさゆ
ちくらい月も影ときそく
かぞへ所の涛を何わたる時は友
の歌に玉台也よりとにものなき
ゆよ手学作智のみあきとにすれ

権頭右大下

人はよりつうすい葉のまとひそく
とえもとふかのしへのりわ
維摩経十喩此身如水中月とい
へとをよめる

前大僧正永範

まかいつの経よこしはいつくの光るもの
けふやわたらやとらす月のさ
鷲の山にて豊前学従ふ和の事
生まそ世の謂み卯ちの時に
日の山花みちむかえとものと說の
讀むとて色ことを歎てのまとの
仙洞にとよまわて行わるの雑よみ
よもなわに少那い雪の下里てろく
我よそず返所の本にてつりかわく

法印慈圓

いとしくもかしの秋やたかまくと
おもふものからしらぬかしき雪
をし　　寂蓮法師
君かためちよもちよとかさねつる人渡宮よ
むかしのよもさむからにくもりぬとも
法華経の弟子品の内秘菩薩
行のうちをよそにはわかる
　　右近中将公経
たとへてもくるしき海をわたるとや
そこちかくしらせぬ人のかへるらん

摂政右左下のすみかまよふくるゝ海
をはわかる時はまなのかはてよ
般若経の心をよめる
　　前参議信範卿
是行のむなしと知りぬることの葉
ことはのほとけのこともしるやく
四方をその時は経の色即是空と
即是色の心をよめる
　　摂政家丹後
むなしきもいろもそのまゝとまとしや

まつのこゑのみそまたなかるらん

法華経乃我等長夜所習宜説之心をよみ侍る

権中納言師仲

たまれよもしむなしきものとちりぬれは
いやうくあらくめくるあかつきもなく〳〵そまて

寿量品乃心をよみ侍る

圓位法師

鷲乃山月を入ぬと見る人ハ
くらきにまよふこゝろなりけり

勝西上人雲居寺乃極楽ニ堪河

たてまつりけるに蓮をよみ侍
まつりによみ侍

神祇伯顕仲

いとはれよはれ池にはちすのひらけなし
きよきこゝろやそむとおもふかゝわさと

大般若経乃常啼菩薩乃心をよみ侍る

寂超法師

なきつゝる袖ハいのちのつまにして
むなしとはたのむ法のこと葉ゝ

維摩経十喩此身ハ夢乃ことしと

いへる心をよめる　藤原資隆朝臣

見る程ハ夢もたのまるはかなきハ
うつゝもいまはうつゝともなし

登蓮法師

おとろかぬわか心こそうかりけれ
はかなき世をは夢と見なから

高野にまうてゝ京なる人に申つかはしける

寂蓮法師

あかつきをたかのゝ山にまつほとや
こけの下にもありあけの月

煩悩即菩提の心をよめる

式子内親王家中将

思ひとく心ひとつになりぬれは
こほりも水もへたてさりけり

観音の誓を思ひてよみ侍りける

前大僧正覚忠

たのもしな花もつゐひはまさるなと
つみもよし枝も花さく花そかる

法華経序品の心をよめる

藤原伊経

春ことになけきしものを法の庭
ちるはうれしき花も有けり

授記品の心をよめる

左京大夫季能

水草ゐしこゝろもすみぬれは
ところしも月まちえたる有明き

法師品漸見湿土泥決定知近
水のこゝろをよみ侍ける

皇太后宮大夫俊成

むさしのゝほりかねの井もある物を
うれしく水のちかつきにける

提婆品の心をよめる

顕昭法師

谷水をむすひし人のこゝや
くみそめしもとゝもしらん

勧持品の心をよめる

法橋泰覚

くもりなくかゝやくみちの月
いつかのりもしいまはたかわ

右京敦仲

うらみしも高きやまのはよのなん
たゝくもりなき月にまかせて
神力品乃如日月光明能除諸幽
冥乃心をよみ侍ける
道性法師
日乃光月の影とそてらしける
くらき心のやみもはれなん
勧発品乃心を
とこしへにまよふ道をもかへりみて
皇太后宮大夫俊成
のりをしるかなかくれなき身の
勧発品乃満之七日已来六牙白
象乃心をよみ侍る
中原有安
侍りしいのちまもるかけ(?)もありなん
いつのまにかしらぬ乃月
普賢菩薩法とことに心をよみ侍る
中原清重
ゑかゝるよ法のちかひをたのむ
あまのとのひらくもそらの月

山階寺の涅槃会にまうてゝ
遮那大蔵のむかしをおもひ
てよみ侍りける　　登蓮法師
望月の雲かくれけむいにしへの
あはれをけふのそらにしるかな
涅槃経の如執明鏡見諸
色像の心をよみ侍る
　　　俊恵法師
きよくしもくもらぬ人のこゝろには
影のこらすうつりもやする
大悲久不能といへる心をよめる
　　　寂然法師
煩悩のまよひしたにそかくれなき
たゝちりいたつらことゝもなき
阿弥陀経の心をよめる
　　　平康頼
名をきく音も波のをとまてみなかたる
松ふく風も法をとくとはなりにけり
天王寺仏舎利の時ちかき曲

とふるなにはもとよりなにゝ

藤原定長朝臣

なにとなくみなといふものりよのまよをと
しめをそへつゝ千世を時としく思ふ

天王寺にまうてゝ遺身舎利を
礼してよみ侍りける哥

天台座主明雲

常よりもねたましいやまたむは
よしぬる名をもえとかくるあるもき

往生講の式書侍りける時静縁
のちにそへてよみ侍りける哥

律師永観

みな人をわたさんとおもふこゝろこそ
こくらくにゆく
しるへなりけれ

千載和歌集巻第二十

神祇歌

後一条院御時はしめて春日行幸
ありけるに一条院の御時の例を
おもひいてゝよませ給ひける

上東門院

みかさ山さしてそきつるいそのかみ
ふるきみゆきのあとをたつねて

長元八年関白左大臣家歌合に住吉
をよめる後左方の人にかはりて住吉

古よ[illegible]住吉[illegible]
[illegible]

大納言経信

住よしの神もあはれとおもふらむ
むなしきふねをさしてきたれは

白河院熊野へまうて給ひける御供の
人々しほやの王子にて歌よみ
侍りけるによめる

後二条内大臣

おもふことくみてかなふる神なれは
[illegible]

さもりなしよめとをたくるへとすれわ
百王まもらしくる時神鏡云ふとよ
まをせ給ひける崇神天皇
元の人崇もちまいに光ともいひて
神も仏も仙併もなりにしとあわ
前宗清備御下
見なの下乃とくのしとや梛葉
このもく乃山つまとしつゝかさ
少納言高國信告りましてきふそ
信わりく時なとはわりくる

大納言隆季
神代よりわはする乃備はなおして
為ぬる人としつのわまへしも
大納言雅しやそへつ人をいわ
ありる時信告紙紙云合と云人を
又見付わりるに遣懐の御とある
又信わりる右大下
かうつまとへんとを為よりわ見ゆ係し
さうこしりいきつ又とおもよよ
御後神感ありやうよ夢悪ありせ

大納言よし置侍りて侍りけるとなん

皇太后宮大夫俊成

徒よ山まわるかもとも侍りし 俊
松ふきとうまとも君れきこゆるん
国云会よ於乃月とかくるやは
見侍りける 右大
山まりけるもあしのいとまあれ
むつしもや侍るかたの月
俊恵法師
住よしの松のかせのうゑにはまわも

月さしあれは霜ふきたかわ
唐国於松云会とて人々よき侍る
時於乃雪としてゐるを清る
見える 權大納言實國
まして見えて雪乃しき松のはれ
うきとしのまふのまさるへきらん
有間乃国よまつおひて清華侍りける
清侍りける湯乃明神とは
三條乃明神ともさへいわゆる所
よませて侍りける

梅宮使資賢

めくしくの梅まもとこ備の神
志のすへあまねく内のまへあかる
熊野小まそしてつわるる晴發門
乃まりにまそしよみかはりける

權中納言經房

うきしつもし神のもちのひとこ志
こころもと越にしにまへ入め原
こ備社りそ雲をもとにかはりける

僧都範玄

松のしたのかにこ梅にとみわ山
神のきみいのりをわらわ
荒人かふかうまもと顕て
賀茂社のまそにかはりけるこ子
之百にもよしあまわけり晴まて
社よまそし梅にき付かはりける

平實重

今さらによふとき乃かひも
わりまつやき神もとたの見とて
千よし梅かへ顕かし荒人にわ付

くらゐ近衛院の御時なれは
竹園の猶よそにはなれたるを同社の禰
宜よりかしこまり申つかはすとて書付
侍りける
賀茂政平
せくまへもとしもたのみしかひのゆふたすき
かけつる神にかへしては
ゝしたなきわかみなれはこそなけかるれ
もしさゝれん猶遠よもかれゆるよ
かは
百ゝなるしまよ神職のとそよ
こかれしかる
武よ内影見え
こゝろにしたのむかひのことゝひて
なつくるしきにわかぬのしたつゆのそれ
賀茂社歌合とて人々
よみ侍りけるに述懐の心を
とそくよそ侍
賀茂重保
君をいのる心のうちをよそにみえ
まけいつもとしの神まつりの袖
同社後番歌合の時月といふ
こゝろをよめる
皇太后宮大夫俊成

安人年弥河の色ら風もとの岩波ゆ
こちへもとくるゝ松ゆよの月
恵慶乃ゐ(?)ゆみよりの歌(?)
清輔朝臣
しかたの色はるのきとハあふ山ゆ
さらハのちの人まのそらもしとるゝや
日吉社にて法華経(?)を(?)わかち(?)講(?)
かつまでをわかるゝこと時りまそて
時(?)まつ(?)ゆ世(?)ハよう見(?)ゆ(?)わかる
中(?)宗(?)師尚

こ枝(?)ゑのむ三ゑ秋の子よ雲晴て
うつり日より行きそもとまつゆる
二見(?)乃山をも保つりて性(?)保(?)圓(?)
りうるゝの風(?)にむ(?)まるをゆ(?)わかるよ
大神宮乃清山をも神路(?)山とも大
日本(?)乃ゆ垂跡とおもひてよみ侍
るなり
圓位法師
かく大(?)ぬ神路乃おくをたつぬ(?)れ
まゝ(?)のうたのたかきこゝのわか風
治兼四年十一(?)月(?)三(?)日(?)時(?)伊勢(?)大神宮(?)

よろつよもいつまても君の御行末
住わたる次よりこえ行わかれ

大中臣為定朝臣

月よみの神しるらめや八雲の
めくるあらうきよもしつまりてや
よ波をつきやさしく立よるまて
ゆきまとも見えし

石清水乃秋の今日よりも人そ
住わたる晴の秋乃月とそいつる空
よみ住わたるまて

能因法師

石清水寺より流れてたえせぬは
やとる月としもなくなくてわか

長元九年後朱雀院御時大嘗
會乃主基方乃神楽乃哥
丹波國神南備山をよめる

藤原義忠朝臣

常盤なる神南備山の榊葉を
さしてそいのるよろつよのため

治暦四年後三条院御時大嘗

會に寄る神祇といふ心をよ
み侍　　前東経衡
うこきなくみよをたもつるいや山
とるもしの萬代のことの葉にして
寛治元年𦾔河悠紀清暑大嘗
會悠紀方神あそひのうた請録
乃歌もとよみ侍
式部大輔匡房
いはしへの神社は清代よりは諸神の
祈るよりはひゝ果のよりあるめ
久寿二年清暑の大嘗會
悠紀方の神あそひの歌近江國
綿園ちとせ作わた侍
式部大輔永範
神よしのとよあかりに松園の
ゆふけつゝみやかれもそらにかな
嘉應元年大嘗會清暑大嘗
會悠紀方乃神あそひのうた近江
宏宇山もとよみ侍
白あさもとい百よろつ代の神もこれ

ときはにまもる山のかけのかくれなき

壽永元年大嘗會の主基方

云々よみてまつりわか神楽

乃謌丹波國神南備山をよめる

權中納言兼光

乃まよ花をよめるよとまのすみの神南備

山かけとこさきもとをしよもなりけら

元暦元年大嘗會之清暑大嘗會

悠紀方云々よみてわかの明神楽

うたの謌近江國守護神をよめる

參議季經卿下

もはの神かけのみ山のいくつのふかし

君もと八千代といのるまこと八

同大嘗會乃主基方乃云々よみて

いそまつわかくにゝ神樂乃歌丹

波國千年山をよめる

藤原光範朝臣

千年山神さひにける榊葉の

とこへまさる條々そ

君のためとの

申出春宮御本書写之

此集叡覧之本候物草也料紙
色紙白表紙青羅軸（紫檀摺貝露丸）撰者自筆
外題金泥（中務権少輔伊経書之）納蒔絵手箱蒔
筆手件筆手撰者自筆にて和
歌二首書之其歌曰

和かの浦によするこのもくすハかきつめつ
万代さのえ小君の光みせよ　萬よ藤之
限りなきたのもしかたの光君か代
あまのかは浪のうき木とおもひ入ハ　あま藤之

文治四年八月廿七日以撰者自筆皇太后

宮大夫入道自筆之本自書写之
雖令校見若為不知之書之本
審之事乃向後撰者之詳相
尋子細也付手本也
給保季朝臣（又有奥書云）左判
二位入道（覚空）
宮内卿　左判　秘蔵之
以本写之
以此等之本令校本奥令校合愚本仍令
所令二字也但以愚筆令書写之間
文字訓不可有正誤只依数寄

志恩後日之嘲而已
應永卅四丁未年正月日　前上総介範政在判

入道正三位皇后宮大夫俊成（本名顕広　法名釈阿）撰
之去壽永年中奉可撰進上之
後白河文治三年九月之比奏覧之
此集撰集之時為清輔朝臣有　數感
尋聞食藤鈴歌則以一巻草令
書進之清翌日彰清教書状云
撰者詠頗多之火可撰加進之仍
後日切入自詠云々其後撰者詠
三十五首　云々

此事細以後子息侍從定家説所注進
于時應永卅四年三月重而加校合畢
従四位下源朝臣範政在判